



タイトル	韓国人による恥韓論
著者	シンシアリー (SincereLEE)
出版社	扶桑社新書
発売日	2014年6月10日
ページ数	257ページ

韓国の朴槿恵大統領の告げ口外交に呼応して、日本の読書界では、「悪韓論」、「呆韓論」、「愚韓論」、「犯韓論」等のベストセラー群に加えて、今度は韓国生まれ、韓国育ちの生粋の韓国人による「韓国人による恥韓論」が出版された。



著者は、母親から日韓併合時代（1910～1945）に学んだ日本語を教えられ、子供のころから日本の雑誌やアニメで日本語を読んだり聞いたりしていたため、ある程度日本語の読み書きが出来るようになったという。著者の名前はシンシアリー (SincereLEE: 匿名) で1970年生まれの歯科医 (男性) である。匿名にしたのは、「日本統治時代は良かった」と言うだけで、95歳の老人が撲殺されたような「反日無罪」という法治国家とはほど遠いお国柄で、実名でこの種の本を出そうものなら、社会的生命どころか、本当の命まで奪われかねないからだという。

著者は、日本の地上波放送のテレビを録画したビデオ（当時韓国にはビデオなどなかった）などから日本の姿を知り、その雑誌や書籍からも、「韓国で敵視している日本はどこにも存在しない」ことを知る。すなわち、韓国が声高に叫ぶ「人類史上最悪の植民地支配」とはおよそかけ離れた事実を知るに至り、このことを世に知らしめるために、韓国の「反日思想」への皮肉を綴った日記「シンシアリーのブログ (<http://ameblo.jp/sincerelee/>)」を始めたという。

著者は、

- ・韓国を支配する「反日教」の正体を、
- ・その起源を、
- ・そしてますます悪化している現状を、
- ・善悪を失った「基準」を、

- ・隠蔽してきた韓国の性奴隷の実態や、
- ・今後日本が韓国と外交する上で欠かせないと思われる方法などを提言している。

韓国では、反日でないものは国賊扱いにされ、見つければ社会的に抹殺される。著者も、例外でなく犯人探しを何度もされたという。

本書は、韓国人はなぜそうなのかという文化や民族心理からのアプローチが見られ、事大主義の病理に陥っている韓国人の内面を曝<sup>さら</sup>け出してくれる。

さっそく、目次を見てみよう。

はじめに —— 韓国人である私が「反日」にならず、ありのままの韓国を告げる理由

序章 韓国を絶対的に支配する「反日教」

第一章 韓国を狂わせた「反日」の起源

    第一節 崩れ去った「忠孝思想」

    第二節 「告訴・告発」乱発の国民性

    第三節 韓国はもともと「反日」から生まれた国

第二章 善悪を失った韓国の愚かな「基準」

    第一節 哀れな韓国が抱き続ける日本へのコンプレックス

    第二節 気に入らないものは何でも「右翼」

    第三節 「日本のせいで台無しになった」文化財の真実

第三章 韓国がひた隠す自国の性奴隷

    第一節 韓国が主張する「日本軍慰安婦問題」の矛盾点

    第二節 抹殺されつづける自国の売春婦問題

    第三節 慰安婦問題の本質は女性人権でもなんでもない

第四章 だから「反日」は急激に悪化していく

    第一節 韓国人の異常な「序列意識」

    第二節 「上下葛藤」＝「世代間葛藤」

    第三節 「チェミョン（体面）」という虚像のプライド

第五章 荒唐無稽な選択・新「李承晩ライン」

    第一節 アメリカでも死力を尽くす「反日工作」

    第二節 竹島領有権問題の始まり

    第三節 「連韓制日」という中国の策略

第六章 見苦しい国・韓国の最大の弱点

    第一節 「距離を置く」外交のすすめ

    第二節 「日本国民は韓国が好き」という韓国の主張

    第三節 『朝鮮及台湾ノ現況 1』朝鮮人志願兵の真実

## 終章 韓国人である私が知ってほしいこと

目次を見ていくだけで、韓国での生活は息が詰まりそうな感じを受けるが、ちょっと中身を覗いてみよう。

### ・「日本には韓国が文化を与えた」という哀れな妄想

韓国人は、日本には韓国が文化を与えた、そのおかげで今の日本がある。そういうことを信じて疑わない。今の反日思想と同じく完全に一方通行で、日本から文化人が入ってきたことは認めていない（国同士で交流したなら一方通行などあり得ないのだが?）。

今でも、韓国人は、昔の日本人のことを、「文化も何もない野蛮人だった」と信じている。しかし、本当は、日本が昔から「皇」を名乗っていたことだけ見ても、諸侯国である朝鮮よりは強い勢力だったことが判る。

また、韓国が「日本に教えてやった」というのも、辿ってみると、韓国が起源というわけでもない。大した根拠もなく剣道、桜、茶道から忍者に至るまで、何でも韓国が起源だと主張するから、ネットでは「韓国起源説」(Wikipediaの韓国起源説には呆れてしまうが)と日本や中国からも笑いものにされている。天皇に韓国人の血が流れていると主張しているのも、これと同じ路線だ。

「韓国の近代文明のほぼすべては併合時代に日本から入ってきた」という、韓国としては認めたくない現実に対し、兄として存在するための最後の抵抗をしているのだろう。著者は、場合によっては哀れで見られないと述べている。



中国の習近平主席や韓国の朴槿恵大統領が日本の安倍首相との会談に応じないのは、安倍首相が膝を屈して来るまで会談に応じないという事であり、「兄」である中国や韓国が「弟」である日本が「兄」として敬うように要求しているのである。国家に兄も弟も無いと日本人は思うのだが、中国と韓国は違う。

国家に上下関係を求めるのは「外交問題」であるが、「中華思想」とは中国が「兄」であり周辺国は「弟」として「兄」を敬わなければならないという。中国や韓国が日本に対して歴史認識や右傾化を理由に会談に応じないのは表向きの理由で、安倍首相が膝を屈して中国を兄として敬う事を要求しているのである。

自分たちが持つ価値観を、他国にも押し付け、それに従わない国を苛め抜くなど、全く呆れた隣人である。

### ・韓国が主張する「日本軍慰安婦問題」の矛盾点

韓国が日本を攻めるときに真っ先に使う強力な“ねた”は慰安婦問題だ。韓国側の主張は簡単で、「女性の人権問題」という一点集中の攻撃である。「日本軍が朝鮮半島全域から20～30万人に及ぶ若い女性たちを強制的にさらったり徴用したりして、性奴隷として扱った」と、実に判り易い設定だ。



「日本軍が朝鮮半島全域から 20～30 万人にも及ぶ若い女性たちを強制的にさらったり徴用したりして、性奴隷として扱った」という記述を見るたびに疑問に思う。というのも、それだけ多数の若い女性たちが被害に遭ったのであれば、たとえ日本軍が相手であろうとも、プライドの高い韓国の男性たちは命を懸けてでも女性たちを守ったはずである。同年代の男性で、自分の家族や知人の女性が強制連行されたという証言が全く出てこないのも不思議だ。そんな歴史は何処にも残っていないからだ。韓国の男性たちは、ただ指をくわえて見ていただけなのだろうか？

しかし、1983 年に日本で慰安婦問題を提起する本が日本で出版された時には、本で「15 人が徴用された」と指摘された済州島の該当地域の住民たちが、「そんなことあり得ない」、「本を売るための日本の恥知らずの商法だ」とまで非難した。慰安婦問題が聖域化されている今なら、考えられない内容だ。韓国がこの問題に飛びついたのは、日本の「朝日新聞」が 1991 年から慰安婦問題を積極的に取り扱うようになったからだという。

慰安婦の存在そのものを否定する人はいない。それがあつたのは事実である。この議論のポイントは、彼女たちが性奴隷であつたかどうか、そして日本政府が直接介入していたかどうかだが、日本政府または軍が直接的に介入したという証拠は何処にもない。

しかし、日本側がそれを認めないと、「日本を絶対悪」に設定することが出来ない。焦つた韓国側は、「証拠がないからといってそれがなんですか。両国の関係のためにも認めて下さいよ」とゴリ押しした。その結果、1993 年、日本側は「河野談話」で、慰安婦の強制性を認め、謝罪したというのが真相である。

韓国側の河野談話関連記事で、当時の日本の官房副長官はこう話している。「軍の命令、連絡文書などをすべて見たが、軍や官憲が慰安婦の意思に反して強制的に募集したことを裏付ける資料はなかった」、「当時の宮沢内閣は、未来志向の日韓関係を構築するために、証拠はないけれど、慰安婦の証言を受け入れることにした」とある。

しかし、個人レベルならともかく、国の発表した談話が証言だけをもとにしたというのは、実に意外だ。韓国政府が保護している元慰安婦は 2014 年時点で 54 人だけだ。残りは何処に行ったのだろうか。本当に 20～30 万人もいたなら、十数人だけの証言で国が頭を下げたのは、さすがにおかしいことだと著者はいう。

両国が言うところの、志向する対象が「未来」なら、その未来の人達にも評価を下す資格があるはずだ。著者は、慰安婦問題について次のような三つの側面から突っ込みを入れている。

1. 韓国は、朝鮮戦争で「韓国軍も慰安所と慰安婦を運用していた」のに、なぜそれを同じ慰安婦問題として扱わないのか。
2. 韓国は、在韓米軍相手の「慰安所と慰安婦を韓国政府が直接管理していた」という文書まで公開されたのに（その後、文書は非公開になったが）、なぜそれを同じ問題として

扱わないのか。

3. 韓国は、「過去の韓国人慰安婦」にはそんなに気を使うのに、なぜ借金漬けで性奴隷となっている「現在の韓国人売春婦」たちを無視するのか。

ある主張に対して、肯定するか否定するかは、人それぞれだ。しかし、その主張に明らかな矛盾があって、明らかにダブル・スタンダードがあって、そこを指摘するとなると、話は別である。

韓国が主張している慰安婦問題には、日本人からすれば「お前が言うな」という言葉で解決できる明らかな矛盾点が存在する。上の三つの側面は、それを明らかにしてくれるだろう。

日本政府も、ここは腹を据えて取り組む必要がある。日本の若者たちが「河野談話」を真に受けて、誤解に基づく「引け目」を感じるようではいけない。若者たちの自信回復がなければ国力の回復もない。韓国のプロパガンダに蹂躪されてはならない。

#### ・日本で災害が起きると大喜びする「基督教」

韓国には保守勢力と仲の良い「基督教」の存在は無視できない。韓国のキリスト教には大まかに分けてカトリック（天主教）とプロテスタント（基督教）がある。人口比率でいうと、プロテスタントが18%、カトリックが11%なので、キリスト教は全人口の約3割ということになる。

日本で見かける「韓国系のキリスト教」はほとんどがプロテスタントだ。韓国人が日本を非難する時によく使う「日本は金持ちだけど、日本人は貧しい！」というのがあるが、これはプロテスタントが広げた「負け惜しみ」の一つである。

韓国の基督教勢力は、プロテスタント勢力の弱い国、特に日本（クリスチャン人口は1%程度）で何か悪いことが起きると、大喜びする。地震や津波など自然災害の場合は「神様の罰だ」と言って特に喜ぶ。神道の頂点にある存在を目の敵にしているのは、言う必要もないだろう。

著者がこの件について確信を持ったのは、東日本大震災で、基督教でも屈指の大勢力である某教会の、超有名な元老牧師（著者のブログには実名が記されている）の礼拝演説を聞いた時だという。

「たかが人を、天の皇帝（天皇のこと）などと呼んでおるから、神様が怒って、どーれこいつら！と罰を与えたんですよ」と、彼はニヤニヤしながら話していたという。

イエスは「隣人愛」を説いたが、この牧師は日本を憎むあまり、自分の救世主の基本的な教えすら気が付いていない。

最も罪を憎むべき、最も差別を憎むべき、最もできた人間でなければならぬはずのキリスト教徒で、しかも超有名な元老牧師が、信徒を前に、平気で「神様が罰を与えた」と

暴言を吐いたのである。

こういうところに、韓国の根深い病理が潜んでいると著者は嘆く。

#### ・「距離を置く」外交のすすめ

著者は、今後日本は韓国に対してどういう態度をとれば良いかを示唆してくれる。韓国が最も嫌がる態度をとれば良い。しかし、それは、韓国がやっているように「根拠のない」、「ダブル・スタンダード」、「ゴリ押し」、「極端」などの見苦しいものであってはならない。

韓国は、日本に対して「皆で仲良くしないとイケない。だからお前が俺に合わせろ」と強要する。韓国の言う「友好」とは、日本が一方的に韓国の言いなりになることを意味する。日本は、日本が好きのように存在してはいけない。韓国が好きで存在しなければならない。そうでなければ日本を認めない。そんなものは存在してはいけない。それが韓国の日本観である。

ここには、外交の基本である「同等の立場」が最初から成立していない。したがって、日本は基本だけに忠実な外交を仕掛けるしかない。すなわち、距離を置く外交だ。基本的なことだけを維持しながら、別れの時が来たら、軽い一回の握手で「サヨナラ」できる、貸し借りの関係であればいい。韓国に何か良いことがあったら「おめでとう！」と言ってあげる。何か悪いことでもあったら「ご愁傷様です」と、声をかけてあげる。

ただ、韓国が何か礼儀に反する行動でもしたら、日本は容赦なく叱るべきだ。多額の金銭の支援や、韓国からすぐ反故にされるような条約などは結ぶべきではない。

何もかも、基本的に、マニュアル的に対処すれば良い。「隣国だから仲良くしなきゃ」とか「隣国に配慮すべき」という理想論で、日本側が近寄る必要はない。というのも、こんな状況を作ってしまったのは韓国側に責任があるからだ。

日本側が韓国に「首脳会談をやろう」と声をかけた。普通大統領や総理が変わったら、一度は首脳会談をやるのが世界の慣例だ。しかし、韓国側が拒否し、未だ会談を開くことが出来ないでいる。日本から日韓首脳会談の開催を韓国側に再度打診したが、韓国は「会談が実現するためには、独島問題、慰安婦問題、歴史教科書問題など（解決しなければならない）いろいろな部分がある」と話し、韓国側は日本の提案を拒否した。

アメリカやその他の国から見ると、「日本は極めて基本的なことを提案しただけなのに、韓国はどうして受け入れないのだろう？」と不思議がっている。

韓国が首脳会談に応じようと応じまいと、日本が損をすることはない。これが距離を置く外交というものだ。「河野談話」のように、日本から積極的に近寄る外交はやってはいけないのである。間違いなく、韓国に利用（つまり悪用）されるだけだからだ！と著者はいう。

韓国は劣等感を癒すために、日本を苛めて、快哉を叫んでいるが、劣等感はネガティブなものだから、やがてマイナスに作用してくるだろう。

韓国にとって「反日」は、もはや事実や現実よりもはるかに上位に位置しているようだ。韓国人は、日本が絡むと、一気におかしくなる。日本を蔑<sup>さげす</sup>み、攻撃する。平気で嘘をつき、法を曲げる。そうでもしないと、「精神状態を維持できなくなる」からである。

凄まじいまでの修羅の妄執。韓国人は、もう「反日」がなければ生きていけない段階に到達している。

以上のように、韓国の恥部を韓国人自身がここまで痛快に書き綴った本も珍しい。体験談をもとに書かれている部分も多く、とても説得力がある。

韓国には、これが民主主義のものと法治国家かと思われる部分がある。いわゆる、遵法精神の低さや非寛容さは、日本が絡むとさらにエスカレートする。いわゆる、「反日無罪」や条約や協定といった国際法を平気で無視する動きは顕著である。これでは、国際社会では生きていけないと思うのだが・・・。

「反日」は、韓国にとっては不都合なものを消すための消しゴムのようなものだ。反日の為に韓国は、「反省も謝罪もしない邪悪な存在である日本の姿」を捏造し、すべての責任を日本になすりつけている。しかし、反省し、責任を痛感すべき存在は、日本ではなく、韓国、いわば自分自身なのだと著者はいう。反日が高価な代償を伴うことを韓国に教えない限り、韓国の捏造に基づく反日は止まないだろう。

日本のメディア（朝日、毎日、時々NHK）は日韓の首脳会談が開かれないと、すぐ「孤立する日本」と書きたがる。しかし、韓国の方が極端な少数派であり、韓国を除く世界中で日本は歓迎されている。歴史問題をめぐる対日強硬姿勢で世界から孤立しつつあるのは、むしろ韓国の方である。



韓国人が外国でトラブルになると「俺は日本人だ」と言うそうだ。「嫌韓」はやっと日本国民の常識が国際水準に追い付いてきた証拠でもある。最近の統計で日本人の海外渡航先は、台湾がトップに躍り出て、韓国はベストテンから脱落した。結果は、1位：台湾、2位：ハワイ、3位：シンガポール、4位：グアム、5位：イタリア、6位：ベトナム、7位：フランス、8位：アメリカ、9位：香港 10位：スイスの順番だった。これまで、日本人の海外渡航先で1位だったのは韓国、2位は中国だった。しかし、中韓の「反日」ですっかり嫌気がさして仲良くランク外に転落した。隔世の感があるが、当該国家の「民度」に日本人がいかに敏感であるかという事態も示唆している。3位に反日のシンガポールがあるのは、同国が近年「反日路線」を止めたからだと推察される。日本で「韓流ブーム」が一時的なもので終わったのも、日本人にとって韓国の普通の人々の暮らしが憧れでも何でもなかったからだ。結局、あのブームは韓国政府の資金による一種のドーピング効果に過ぎなかったのである。

エドワード・ルトワック（米戦略国際問題研究所）は、「中国抑止に韓国は日本の戦略に組み込めないという。朴槿恵大統領が伊藤博文の暗殺者安重根の記念碑を中国・ハルビンに立てることを中国に提案したのも、「感情や非理性的な憎しみ」からきたもので、世界的に見ても極めて異例だという。

憎しみの原因は、「韓国が日本の植民地支配と戦わなかったから」だという。暗殺者を顕彰しようとする理由は、「彼が日本と戦ったから」だというのだ。

韓国の日本に対する態度は、日本が何をしようとか関係がない。いわゆる従軍慰安婦問題で、韓国の反応を期待して何かやっても、成果はないだろう。日本の政策は、韓国以外の世界各国の反応をもとに検討されるべきだ」と述べている。

本書は、「韓国人」による「韓国の反日」における内実を余すところなく論述している点で優れている。

「もう韓国にはうんざりだ。歩み寄ってまで関りを深めるなど真っ平御免だ」という人は多いと思うが、そんな人にもお薦めの一冊です。

2014. 7. 19